

ガザの平和を創り出す私たちキリスト者の祈りと行動

日本自由メソヂスト布施源氏ケ丘教会

安藤 眞一

わたしはお前たちの祭りを憎み、退ける。
祭りの献げ物の香りも喜ばない。
たとえ、焼き尽くす献げ物をわたしにささげても
穀物の献げ物をささげても
わたしは受け入れず
肥えた動物の献げ物も顧みない。
お前たちの騒がしい歌をわたしから遠ざけよ。
豎琴の音もわたしは聞かない。
正義を洪水のように
恵みの業を大河のように
尽きることなく流れさせよ。

(アモス書 5 章 21 節-24 節)

皆さん初めまして、東大阪で日本自由メソヂスト布施源氏ケ丘教会と、にじいろ保育園の責任者をしております安藤眞一です。奨励の機会を与えてくださいます御礼を申し上げます。

皆さん、このマフラーといいますか「ケフィエ」と言いますか、あまり似合っていないんですが、これを身にまとい、ガザの皆さんに思いを込めて奨励させていただきます。

本日の奨励テーマは「ガザの平和を創り出す私たちキリスト者の祈りと行動」です。具体的に申し上げたいことは、「I am in GAZA , GAZA is in me」の言葉を心の中にしっかりと受け止め、これを暗記して毎日どこかで唱えてほしいです。それで、GAZA (ガザ) に平和が実現するまでキリスト者として何ができるか、どうぞ自問自答していただきたいと思います。

今日、皆さんには一枚の裏表資料をお渡ししました。ひとつは6月13日付の朝日新聞と、もうひとつは少し残酷な画像です。ガザでの戦争で犠牲になった赤ちゃんや子どもたちをイエス様が涙を流して、Let The Little Children Come Unto Me と幼い命を憐れんでいる画像です。この作者はラモン・ロメロさんで、彼は英語の先生とグラフィックデザイナーとしても活躍されています。ロメロさんもガザの平和を強く祈り行動されている方です。

この画像をご覧になって「わぁ残酷やなあ」と目をそむけられるかも知れませんね。でも、ガザで起きている現実です。この画像から、ガザの人々の思いを感じ取っていただきたいのです。ガザの建物の9割までがイスラエルの爆撃で破壊され、7万人もの人々が殺されている。ガザの皆さんはどんな思いでしょうか。そして犠牲になった子どもたちの命を感じて頂きたいのです。この6人の子も達は、もっと生きたかった、大きくなったら学校にゆき、大学にも通い友達と遊びたかった。同志社大学にも留学したかったかも知れません。横たわっている6人の子もたちの思いを感じましょう。ガザの多くの皆さんは、殺された子どもたちや人々の為にも、即時停戦を祈り平和を創り出し、子どもたちの笑顔をみたいと願っていると思います。

この13日にはイスラエル、ハマス双方が人質を解放する喜ばしい出来事がありました。しかしナクバ(パレスチナの人々の生活が破壊されること)、ジェノサイド(集団殺人)、皆殺しはまたイスラエルによって繰り返されるかも知れません。予断を許しません。世界からの声、これ以上殺すな、ガザを爆撃するな、との祈りが必要ですね。

私は、東大阪で教会と保育園をしています。毎日、毎朝、登園してくる子どもたちに元気をもらっています。コロナ禍で教会の礼拝が出来ない時も、保育園は休まず続けていますと、教会に子どもたちの歓声と笑顔があふれる。神様の御計らい、強い支えを何度も感じ感謝したことを思い出します。この子どもたちの未来への思いを込めて、今日の讃美歌「このこどもたちが」を選びました。

さて、6月13日付の朝日新聞をご覧ください。祈りの一歩「これを最終回に」との見出しです。この日は3回目の平和巡礼でした。第1回目はいつかと言いますと、昨年3月23日に京都大山崎をスタートして、「ガザの停戦を求める平和巡礼」を実施しました。雨の中を必死で歩き、足に豆を作り、ゴールは41キロ先の布施源氏ヶ丘教会、私の教会でした。

なぜ41キロかと言いますと、ガサの北部エズズから南のラファまで41キロあります。この41キロを関西に当てはめて、ガザの皆さんの苦難を思い、平和が来ることを祈り、平和巡礼コースを決めました。

さらに停戦を祈って2回目の巡礼を実施、そして3度目の平和巡礼を朝日新聞は報道してくれました。この3回の平和巡礼を提案して下さったのが写真右のジェリー横田先生と左のラモン・ロメロさん、先ほど画像を紹介した作者です。この新聞記事の最後の方のラインを引いているところを読みます「午後4時すぎ、ゴールの布施源氏ヶ丘教会に着いた。教会の牧師、安藤真一さんは足に障がいがあるが、生野区からの2時間、歩き通した。みなさんは歩いているのに、自分はゴールで待つ、それはアカンと思うから」と、ほんと、その時は4回目の平和巡礼がないことを心から願いました。ですから、新聞の見出しが「これを最終回に」となったようです。この新聞記事は後ほどしっかりお読みくださいね。

以上が、新聞記事の説明です。私の足の障がいは、30年前の阪神・淡路大震災の後遺症です。当時、震源地の淡路島の岩屋に住んでいましたから被災者となり、元気回復して、須磨や長田に住む友人を助けるボランティア活動をしました。それが原因で腰のスベリ症となり脊椎の大手術をして、その後、左足のしびれが残って歩きにくい体となっています。すみません、個人的なお話で。新聞記事の補助説明でした。

さて、本日の聖書箇所 24 節は、アモス書の大変有名な御言葉です。

正義を洪水のように
恵みの業を大河のように
尽きることなく流れさせよ。

預言者アモスの命がけの言葉です。

この言葉が、南北 41 キロのガザで実現することをひたすら祈る私の思いです。先日からニュースが流され「お!ガザの停戦が実現して和平が訪れるのかな」と内心願うのですが、トランプさんの言う平和ではなく、神様のシャロームが実現することを私は祈ります。

そんな私を突き動かしてきたのは、イエス様が私たちに与えて下さったギリシャ語のスplanクニゾマイという言葉です。この言葉は、内臓、五臓六腑から派生した言葉で「腹の底から深い同情を寄せる。いてもたってもいられない」という意味です。私たちに隣人の助け手としての行動を促す、大切な言葉だと思います。

ルカによる福音書 7 章の「やもめの息子を生き返らせる」場面も、10 章「善きサマリア人」の場面も、スplanクニゾマイが原動力ですね。聖書の隣人愛という行為の原動力はスplanクニゾマイだ、と私は確信しています。ですから隣人愛の行為は、きれいごとではない。誰かに見せる売名行為でもありませんね。小さく弱くされ苦難の中にいる人との出会いの中で、自分のハラワタ、自分の魂の中に、いてもたってもいられなくなる、なんとかしたいという思いがこみあげてくる。皆さんにもそのような経験、出来事があったのではないのでしょうか。

ある学生さんたちは、ガザの平和を祈る栞(しおり)活動を続けておられます。素晴らしい働きですね。みなさんも何が出来るかを是非お考え下さいね。もちろん神様の招き、神様からのコーリングが必要です。皆さんにも、イエス様からスplanクニゾマイの命の言葉が心に与えられますことを祈っております。では、最後にご協力ください。

ご一緒に「I am in GAZA , GAZA is in me」を唱えましょう。ありがとうございました。まさに神の正義がガザを覆い、恵みのわざ、働きが苦難の人々に希望が与えられますように。